

高校教育は生徒学生の 資質・能力を育てる最後の主戦場

—— 高大接続の観点から



学校法人桐蔭学園理事長代理
桐蔭学園トランジションセンター所長・教授
溝上慎一

なぜ高大接続なのか

高校教育(初等中等教育)では、知識基盤型社会、社会の情報化・グローバル化、そして人工知能(AI)に代表される技術革新等による変わる社会に対応した、戦後最大ともいわれる学校教育の改革が断行されている。そこでは、資質・能力(思考力・判断力・表現力等)の育成を全面に打ち出し、変わる社会に適応し、課題を発見して問題解決していく主体を育てるための主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)の視点、カリキュラム・マネジメント等の推進を求めている。

他方で、大学側から見て高大接続が死活問題となってきている。この意味が理解できるかどうか、大学が高校教育の改革を他人事として傍観するか、我が事として関与するかの分かれ目となる。本稿は後者の立場である。

近年の大学教育改革は、AP(アドミッション・ポリシー)・CP(カリキュラム・ポリシー)・DP(ディプロマ・ポリシー)という3つの方針に基づく学士課程教育の構造化を徹底的に進め、さらに、データやエビデンスをもとに、出口の学修成果を可視化した内部質保証の作業を進めている。この作業は、大学がどのような学生を受け入れ、4年間の学生の学びをどのように創り出し、最終的に学生にどのような知識を授け、資質・能力を育てるのか、大きくいって「学生の学びと成長」を教育プログラムとして実質化する取り組みと理解されるものである。

かつてのように、授業や環境だけ提供して、あとは学生

の自律性に任せて「どうぞご自由に」という教育ではない。大学がどのような学生を受け入れて、育てたいかという明確な方針を打ち立てて、それに基づいて教育を行い、その結果をアセスメントして、十分でないところは改善するべくPDCAサイクルを回す、そのような目標と評価をもとにした教育が目指されている。

ところが、大学生のデータを収集して分かってきたことがある。それは、大学1年生前期の学習成績(GPA)が3年生、4年生の学習成績と相関がかなり高いことである。入学時にできる者がさらにできるようになり、入学時にできない者はできないまま4年後を迎える、簡単にいえばそんな結果である。もちろん、この見方に乗らない学生は存在するが、その割合は決して高くはない。

しかも、この話は大学4年間の中だけで済まないことも分かってきた。高校2年生頃の学習力やキャリア意識、ひいてはそれらを支える資質・能力が、大学まで大きな影響を及ぼしていることが分かってきたからである。大学は入学してくる学生をゼロベースで育てられるわけではなく、高校まで良くも悪くも育ってきた学習力やキャリア意識、資質・能力に相当依存して、教育を行わなければならないと理解されるようになってきたのである。ここに、今日高大接続が数段ギアを上げて進められている根本的な理由がある。

高校生で資質・能力の基盤は仕上がっている —「10年トランジション調査」の結果より

京都大学と河合塾が実施している通称「10年トランジ

ション調査」の結果を紹介しよう。この調査は、2013年時に高校2年生であった全国約400校、4万5000人を10年間追跡している調査である。以下で紹介する結果は、高校2年生から大学1年生までの変化をまとめたものであり、溝上責任編集(2018)で示されている。結果の詳細を知りたい方は、本をお読み頂きたい。

本稿では、代表的な結果である図表1から、3つの主たる結果を示す。

第1の結果は、高校時(T1)の資質・能力がかなりの程度大学時(T2)のそれに影響を及ぼしていることである(.28~.41)。別の結果もふまえれば、5~6割の高校生はさほど資質・能力を変化させることなく、大学1年生の秋を過ごし、残りの学生の半分は高校生から大学生にかけて、資質・能力を低下させている。大学2年生の秋までのデータを繋げて分析した結果でも、同様の結果が得られている。これらの結果は、学生の資質・能力の基盤が高校時にある程度仕上がっていること、大学生になってそう簡単に変わるものではないことを示唆している。

第2に、大学時(T2)の“主体的な学習態度”は、資質・能力(T2)全てに影響を及ぼしていることである(.21~.31)。“アクティブラーニング外化(T2)”にも影響を及ぼしている(.21)。これらの結果は、学習への取り組み方が資質・能力

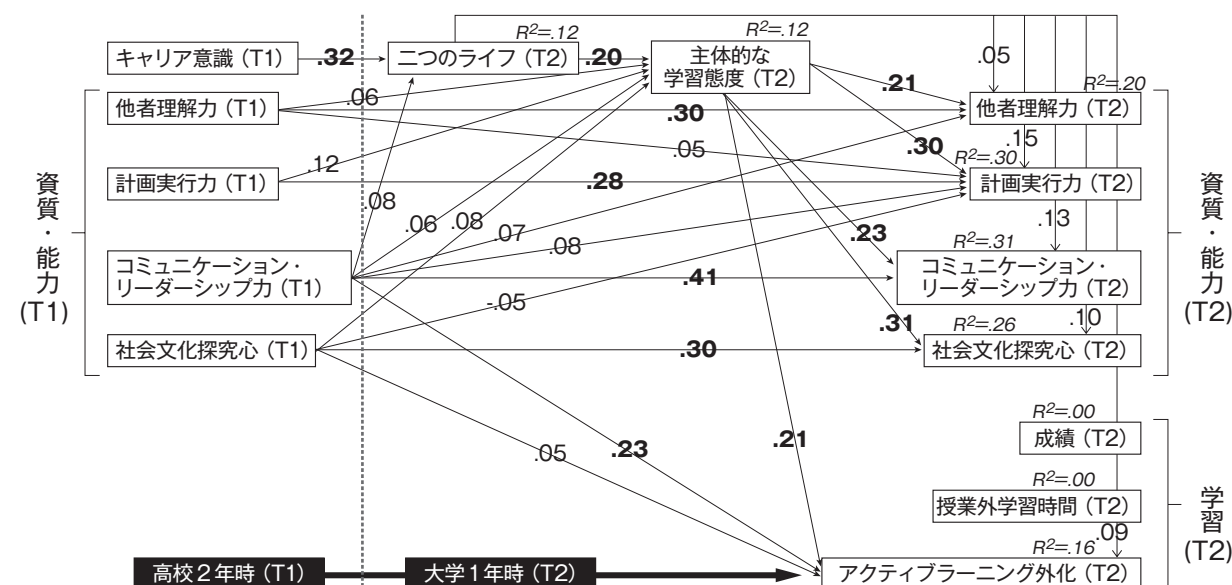
を伸ばすという示唆である。

第3に、その主体的な学習態度は、キャリア意識としての“二つのライフ(T2)”(.20)に影響を受け、かつそのキャリア意識(T2)は高校時の“キャリア意識(T1)”に影響を受けていることである(.32)。資質・能力を伸ばす主体的な学習態度は、高校以来のキャリア意識に影響を受けているという示唆である。

この10年の大学教育改革の成果は 上がっていない

大学生に授業や指導をしてきた経験から考えてみて、大学生が育たないとは考えにくい。私自身あれやこれやと取り組んできて、教育してきた、学生を育ててきたという自負もある。しかし、そこで学び成長したと感じた学生は、入学以前から学習への取り組み方や態度、キャリア意識をある程度発達させてきた学生ではなかったか。逆に、学び成長しなかった学生は、それらを十分に発達させてこなかった学生ではなかったか。必修科目でなければ、学び成長しない学生は自分の授業を受講さえしなかったことも、併せて考えられなければならない。いずれにしても、データを取っていくと、大学生がゼロベースで学び成長するわけでないことは明々白々である。

図表1 大学1年時の資質・能力、学習を説明するモデル



*パス係数が.20以上のものを太字にしている。
*誤差項は省略している。また、パス係数は全てp<.001のため、それを示す記号の記載は省略している。
*データとモデルの適合度はχ²(43)=103.617, p<.001, CFI=.996, RMSEA=.017であった。

図表1で示される数字は、大きなものであるといっても、皆が皆変わらないというほどの数字ではない。驚くほどの変身をするのは難しいとしても、大学で学生が学び成長しないとは思えない。それを言い出せば、仕事をするようになってからの20～40代の新入社員研修や中間管理職研修等、行う意味を失ってしまう。

人は成長したい、変わりたい、目標を実現したいと思って学ぶものである。データが示すのは、この意識を持つ学生と持たない学生との差であろう。高校生までこのような意識を持たなかった生徒が、大学生になって持つようになるのか、否、ならないだろう。データが示すのはこのようなことである。

先般、京都大学と電通育英会で調査してきた、10年分(2007～2016年)の全国大学生調査の結果をまとめた。結果は、『大学生白書2018—いまの大学教育では学生を変えられない—』(2018年、東信堂)として刊行されている。結果の一部を作り直して、図表2,3に示す。この10年というのは、学士課程答申(2008年)、質的転換答申(2012年)、高大接続答申(2014年)という、1990年代半ば以降の大学教育改革をいわば構造的に仕上げる改革期に当たる。三つの方針やキャリアガイダンスの法制化、アクティブラーニングや教学マネジメントもこの時期に提唱された。

残念ながら、図表が示す結果は、この10年の大学教育改革が、学生の学びと成長を促すほどには取り組めていないことを示唆するものである。熱心に教育改革をしている大学や学部があること、熱心に教育を行う教員がいることは分かっているが、日本全体ではこのように言わざるを得ないのが実情である。

図表2は、自己評定であるが、学生の資質・能力の身についた程度がこの10年間、ほとんど変わっていないことを示している。平均点は中点あたりで、身についたと感じる学生と身につけていないと感じる学生の得点が相殺されていることが分かる。自己評定で求められる資質・能力は主観的であり、結果に信頼をおけないと批判する人がいるが、ここでは「成

長したい」「変わりたい」「目標を実現したい」という主観的な意識を問題としてこの図表を示している。客観的に資質・能力が身についたかは横に置き、それらが「身についた」と主観的にでも評定する学生がかくも少ないことをここでは読み取ってほしい。

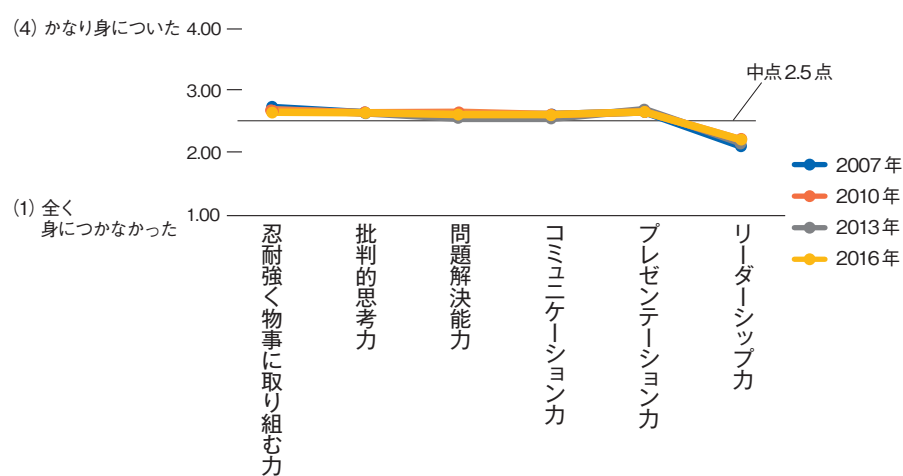
図表3は、キャリア意識としての二つのライフの経年変化である。“見通しあり・理解実行”は学び成長する学生に特徴的なものであるが、その割合は経年変化で落ちてきている。代わりに、学びと成長が弱い学生に特徴的な“見通しなし”の割合が増えている。

資質・能力やキャリア意識は、この10年の教育改革によって上がらなければならなかったものである。1990年代の半ばから大学教育改革に取り組んできて、改革の成果が上がるところか、学生の学びと成長は失速してきている状況だともいえる。深刻な状況である。

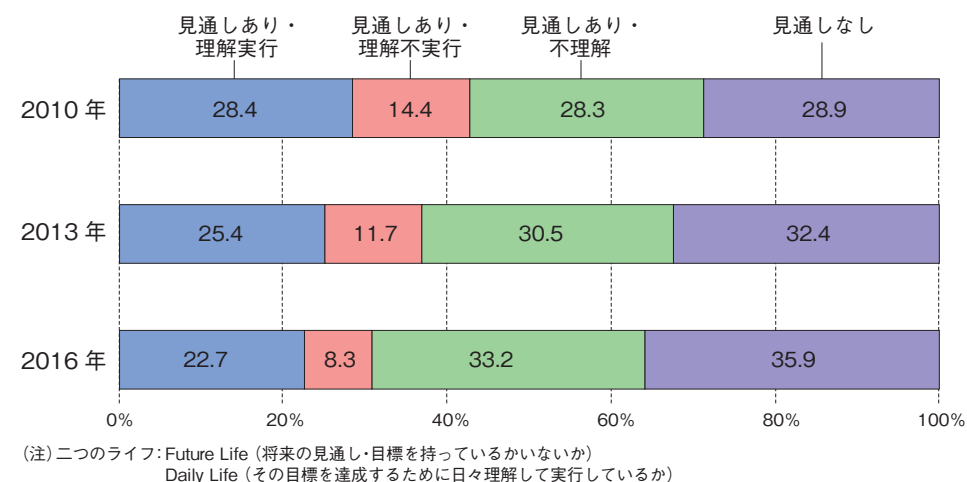
■ 以上をふまえての高校教育、大学教育の課題

求め出せばきりがなが、高校教育にまず求める第一のことは、全教科におけるアクティブラーニングの導入・推進である。なかでもグループワークやプレゼンテーションをはじめとする対話的・協働的な学習が、仕事・社会へのトランジション(移行)をにらんで新しく求められている。その対話的・協働的な学習を通して可視化される生徒の学習や態度・能力を、しっかり育てていく必要がある。文科省的に言えば、対話的な学習を通して主体的・深い学びを育て

図表2 資質・能力の経年変化(2007-2016年)



図表3 キャリア意識(二つのライフ)の経年変化(2010-2016年)



(注)二つのライフ: Future Life (将来の見通し・目標を持っているかないか)
 Daily Life (その目標を達成するために日々理解して実行しているか)

いく必要がある。

求める第二のことは、キャリア教育である。高校時のキャリア意識は大学時のキャリア意識(二つのライフ)のみならず、学習への取り組み方や態度(主体的な学習態度)にも影響を及ぼす。学び成長する大学生のキャリア意識は高いことを、高大接続に繋げて理解することが重要である。

中学や高校でキャリア教育を実施していない学校はないといっても過言ではない状況である。にも拘わらず、大学生のキャリア意識がこれだけ低い原因を考えると、問題は高校までのキャリア教育の質にあるとしか考えられない。イベントで終わらせず、生徒のキャリア意識を本気で促しているのかと問いたい状況である。

少し考えてみてほしい。これだけ中学・高校でキャリア教育が実施されていながら、それでも将来のことを考えられなかった、デザインできなかった高校生が、大学生になってできるようになるのかと。答えは「否」である。データもそれを支持している。最近の大学生は授業参加に多くの時間を費やし、課題も多く課せられ、とにかく忙しい。空いた時間は、昔の学生と同様に、クラブ・サークル、アルバイトに精を出し、忙しさを加速させる。このような中、将来のことを考えたりデザインしたりすること等、よほど将来に動機づけられた学生でなければできないものではない。将来に動機づけられた学生でさえ、高校時のものから結構変わる。いわんや、である。

アクティブラーニングもキャリア教育も、「大学受験が変わらなければ」等と言っている間は本気で推進することは

できないだろう。生徒の大学進学後の、仕事・社会に出た後の、即ちトランジション後の成長を教育者として心から願わないとできるものではない。教育機関、教育者としての基本に戻らなければならない。

大学に求めることは、全授業の中で成長を促すアクティブラーニング型授業を行うことである。特に、4年間の最も多くの時間を費やす講義科目の

授業がアクティブラーニング型へと変わらないと、学生は変わらないだろう。

質的転換答申(2012)以降、たしかにアクティブラーニングを実施する大学や教員は増えている。しかし、前項で示したように、変わる社会に向けての学生の学習力は変わらないか、むしろ落ちてきているとさえ見える状況である。考えられる原因は、例えばグループワークをさせても、その学習プロセスや学習の質に関心をはらい、細やかに指導する教員が多くないからである。言い換えれば、活動はさせてもそこから成長を促す指導がない。高校のイベント型キャリア教育に似た状況である。

アクティブラーニング型授業が実施されていて、学生の授業外学習時間が伸びない実態も信じられないことである(『大学生白書2018』を参照)。国立教育政策研究所や全国大学生生活協同組合連合会の最近の全国調査からも、同様の結果が示されている。まとめて、大学はアクティブラーニングを導入しても、学生を学び成長させることはできていないということである。

高校も大学も、事情は違っても、相当追い込まれている。これまでのツケがまわった結果だとも言える。このタイミングでしっかり課題に取り組み現況を乗り越えてほしいと願っている。

【文献】
 溝上慎一(責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾(編)(2018). 高大接続の本質—「学校と社会をつなぐ調査」から見てきた課題—学事出版
 溝上慎一(2018). 大学生白書2018—いまの大学教育では学生を変えられない—東信堂